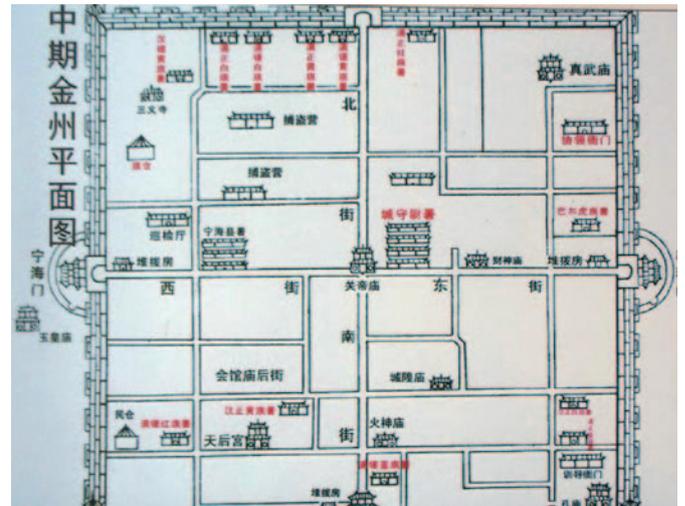


2回目は、8月26日に行った「金州」についてである。金州という街は、ご存知の方は少ないと思う。この街は、行政上は大連市の下部組織ともいえる「金州区」に位置付けされており、大連の中心部からは約30キロメートルのところにある。下部組織に甘んじているが、その昔は遼東半島の軍事上の要の街であった。今はなくなったが四方城壁に囲まれていた。以前連載していた「都市めぐり」で大連市の紹介をしたが、「金州区」は取り上げていないので今回詳しく紹介したい。

大連市は、歴史に刻まれる年月はたかだか100有余年しかなく、それ以前は農村、漁村であった。日清戦争(1894～5年)後の下関条約に対して三国干渉でロシアが遼東半島に触手を伸ばし、1898年から大連・旅順の街づくり、港づくりに着手して以来歴史に登場した街である。一方金州は、清の時代は後述する「金州副都統衙署」という海防のための役所が1843年に設置された。その時よりずっと昔から金州城があり、ひとつの街を形成していた。

金州城の城壁や街の形は、ネットによると12世紀に女真族が建国した「金」のころから造り始め、清(1644年～)代に完成したと有る。500年以上の期間を要したことになるが、当時はいろいろな民族が入り乱れ戦乱の多い時代であり、また女真族の人口はあまり多くないので、すこしづつ造り上げていったのであろうか。ネットを疑うわけではないがそれにしても500年は長すぎると思う。いずれにしても当時の城壁の写真をみると大変立派である。この場所はすぐ近くの「南山」とともに日露戦争の攻防があった場所である。日清・日露戦争を経ても城壁や城門は残ったが、文化大革命(1966年～1976年)の時、すべて壊され



旧金州城平面图。上方が北。

(大連「金州副都統衙署」にて筆者撮影)

てしまったという。中国各地でこの10年で貴重な文化財が数限りなく無残にも取り壊された。大変残念である。金州城も今残っていれば重要建築物に指定されたかもしれない。

ここですこし横道に入りたい。金州の南山といえば、年配の方は日露戦争時の「南山の戦い」と乃木將軍と將軍の詠んだ有名な漢詩を思い浮かべる方が多いと思う。南山は私も大連で勤務した時に友人に頼んで山頂に立ったが100m余りの低山である。この山にロシアは近代的な陣地を構築したため、それを占拠しようとした日本と激しい戦闘となった。地図で見ればお分かりと思うが、この地は遼東半島の隘路になっており重要な戦略拠点であった。1904年5月26日、奥大将の率いる第二軍はロシアの倍以上の死傷者を出しながらも攻略に成功した。この戦闘で第二軍に属していた乃木將軍の長男の勝典は戦死したのである(次男・保典は旅順にある203高地で戦死した)。第三軍の司令官であった乃木は、6月7日旅順に向かう途中南山に立ち寄り、勝典が亡くなったところを悲壮な気持ちで眺めながら次の有名な漢詩を詠んだ。



旧金州城南門(満州大博覧会写真帖 1933、絵はがきから)

金州城外作 乃木希典

山川草木轉荒涼，十里風腥新戰場。

征馬不前人不語，金州城外立斜陽。

この漢詩には、逸話がある。乃木はこの詩をはがきに書いて友人を通じて、当時「漢詩中興の祖」とも言われた野口寧斎という詩人に添削を請うた。しかし彼は一字も訂正しなかったという。なお南山の戦いは以上の通りであるが、金州城は第四軍が三度目の攻撃でようやく陥落した。

ここで私が今回の大連旅行でなぜ金州を訪問したかを改めて述べると……

私は、わんりい 207号(2015年10月号)から9回のシリーズで「元寇と鷹島」について書いてきた。連載する中で、元寇の周辺情報を提供して下さった友人のMさんから新たな情報を教えていただいた。それは元寇に関する石碑が旧金州城北門跡にあること、さらに元寇とは直接関係はないが、金州に「金州副都統衙署」や「石河烽火台」などの歴史的な遺跡がいくつか残されている、ということを知っていただいた。ちょうど8月下旬に大連を訪問することになっていたのでこれらを見学した上で、わんりい紙上に何らかの形で報告し、記録に残したいと思ったのである。

さて金州に入り、まず旧金州城北門跡に立っているという石碑を目指した。この石碑であるが、Mさんがある図書館で「元寇の新研究(池内宏著、昭

和6年刊行)」の中で、「……支那側の新資料としては、大正14年遼東半島金州城の北門外に於いて珍しい石碑が発見された。至元十八年(弘安の役)に従軍した元の東路軍の百戸張成の墓碑銘があった。発見者は岩間徳也氏……」という一文を見つけられた。百戸とは百人を統率する部隊長のことで、張成という部隊長が弘安の役において志賀島周辺で戦った行動記録が石碑に刻まれているわけである。弘安の役の東路軍は、朝鮮半島南部の合浦(今の大韓民国の馬山)から出港しているが、軍の編成は蒙古軍、漢軍、高麗王国軍である。蒙古軍に征服されて配下となった遼東半島から朝鮮半島にかけての民族は弘安の役の東路軍に従軍させられているわけで、張成部隊長もその一人であろう。

その日、一日中運転してくれた中国人の友人が金州城の北門はこの辺りであったはずだが、と言いながら近所のお年寄りに聞くと我々は間違いなく北門跡近くに来ていることが分かった。しかしその周辺はちょうどマンションの建築中で付近の道路には土砂が積み上げられ、道路も塞がってこれ以上近づけない。付近に違う石碑でも、と思って見回したが見当たらない。金州区の役所が工事前にどこかに移したもののなのか？ 折角ここまで来たのに残念でならなかった。

ところが後日、Mさんがやはり大連に昔住んでいた人と話した中で、その石碑は今は旅順博物館にあることが判明したのである。貴重な石碑であるので旅順博物館に運んだものかもしれないが、実は金州にも「金州博物館」という立派な博物館があるのだ。1958年に完成した同博物館入り口横の「金州博物館」碑は、文学者であり歴史家の「郭沫若(1892～1978年)」の揮毫である。「百戸長成墓碑銘」の場所が分かったので、来年あたり旅順に行こうかと思っている。

次号は引き続き金州の見どころについて書き進めたい。(続く)。